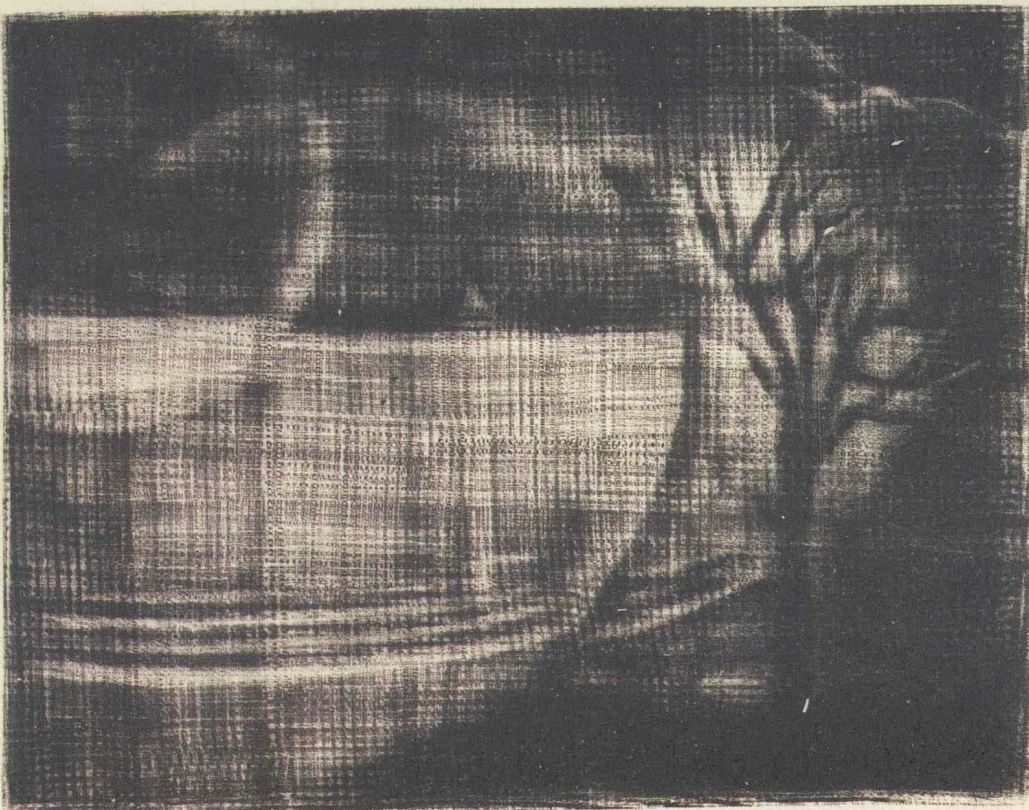


田園風景

坂上 弘

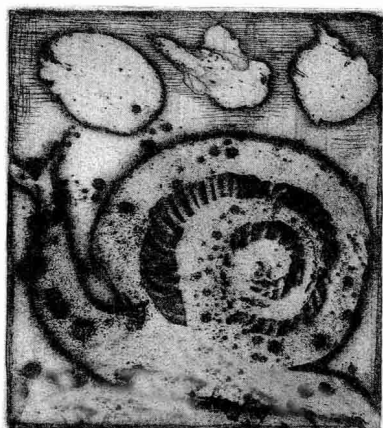


Opus d'Artiste

Tetsuro Komai

田園風景

坂上 弘



でんえんふうけい
田園風景

1992年9月28日 第1刷発行

著者 坂上 弘

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二二二／郵便番号一―二一〇一

電話 文芸図書第一出版部(〇三) 五三九五―三五〇四

書籍第一販売部(〇三) 五三九五―三六二二

書籍製作部(〇三) 五三九五―三六一五

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。なお、この本につ
いてのお問い合わせは文芸局文芸図書第一出版部あてにお
願いたします。定価はカバーに表示してあります。

© Hiroshi Sakagami 1992. Printed in Japan

ISBN4-06-205956-8

(文1)

目次・田園風景

こなゆき	夏野	田園風景	巡回授業	短い一年
119	99	65	33	7

コネティカットの女

149

寒桜

167

向かいて聞く

191

土手の秋

233

あとがき

274

装画 駒井哲郎
装幀 山崎英樹

田園風景

短い
一年

1

定例の健康診断で不整脈が記録紙にあらわれたのははじめてだった。そのとき半日ドックの検査士が、何度やってもそう記録されるので、諦めたように、

「まア、たいしたことはありません」

といつて、ベッドから降りるようにながした。

「ほら。グラフでびよん、びよんとはねる長さが、ちがうでしょう。ですが、緊張なさってるんですよ」

検査士は巻紙の青い線を指していった。

睦男は、とくべつ緊張しているつもりはなかったが、強いていえば忙しいなかをこうしてだらしなく青い衣に着換えたりしているというやましい気持はあった。彼は、素直さを失っていた。

肥っていて髪の毛すい、のっぺりした黄色い顔色の検査士こそ心臓が弱そうなのに、その男から、健康で通してきた自分の方がずけずけいわれるのが心外だった。

仁木睦男は、五十歳になる暮の健康診断で心電図と血圧に要注意という印を押された。それはあたかも、彼の仕事の足をひっぱっている悪魔の囁きのようにとれた。だれでも自分に慎重であるに越したことはないが、気がつかないことまで有り体にいわれるのは気持ちのいいものではない。

ところでその診断結果はまるで、三ヵ月後におこった、彼の異動に対する、わるい前兆のようなものだった。

翌年の二月、彼は外部と折衝することの多い第一線の仕事から、企画室付という何をするのかよくわからないところに移された。辞令は、内示されたその日の夕方に、総務部長が直々に届けにきた。

「仁木部長、これ、どうかひとつ」

と、若い腰の低い、見事に実直そのものの微笑をうかべた総務部長が、白の角封筒を睦男の席にきて手渡した。

うっ、という声を出しただけで、彼はつつ立ったまま沈んだ眼をその変哲もない封筒から上げることができなかった。

咄嗟にうかんだことは、うろたえている自分を抑制することだった。第一線の、現役の場であるこの書類の積み上げられた机から離れなければならない。彼は動揺のあまり、蒼白になった。そして悄然とした顔で、柔和な笑顔の総務部長をすがるように見返した。

「よろしく、……」

相手は役目柄、そういっただけだった。

「あッ、ちょっと」

「後任ですね。まだ正式には……。しかし、仁木さんとわたしの間柄だから申し上げておきますが経理の——さんが……」スマイリーとあだ名される総務部長から笑いが引き真顔になったところは、完べきな役の果し方だった。

夕刻なので部員は半分もいなかった。いつもならその日の進捗や対策の話を交わす、いちばん気まま磊落にふるまっている時刻だった。判断に駄目出しをしたり、遅れを叱咤したり、数字の成績を上げるための忌憚のない議論をしている日々が、急に目前から遠のいた。その封筒をもらった瞬間から、もう何をして、自分の仕事とはいえないのだ、と観念した。

こんなふうに苦痛を味わわせた異動は、容赦なく彼を現役の生きいきした時間から追いつた。ラインからの小休止は彼のいる会社では左遷を意味した。だれにも文句はいえない。なろうことなら、この道一筋できたのだから、格下げになってもいまの仕事が続けたい。何人かの外部の業者とは信頼関係ですすみ出した仕事がある。これも次の者に引継がねばならない。しかし、やりかけの仕事が、その通り運んでくれるかどうかともわからない。後任には、経理畑からくるズブの素人にちかい男が決っていた。

『なぜ、いま替るんだ』

彼は疑問をもち、顔がゆがむのがわかった。勤め人に、納得できる異動の理由などはない。ただ無理矢理、自分ひとりで納得しなければならなかった。誰がかいたものであったか題名も忘

れた外国の小説に、中世に無実の罪に問われて死刑になる男が、刑台の首枷くびかぎにつながれ、ギロチンの音がきこえた何千分の一秒かに、はじめて自分が有罪であると納得した、という残酷な話があった。そのギロチンの音の気配すら、おれにはなかったではないか。

睦男はもうそろそろ勤めて二十五年になる。氣持のうえでそんな実感はなかったが、会社の創立記念日には永年勤続者のなかに名前もでて、家族休暇を一年間のあいだにとるように、と通知がきた。

妻の友子と二人きりの彼はこの休暇をどうすごそうか、と考えたりしていた。

中規模の企業とはいえ輸出に力を入れて会社は堅実にのびていた。彼はそこで販売というどちらかというと派手な仕事を続けてきた。時代とともに変化が早く、飽きることはなかった。

彼は、自分がうごかされたのは、直属の部門長との軋轢けんりくのせいだと思い当った。むろん、単純にこの種の人間関係によってうごかされたというふうには、思いたくなかったが、この部門長とは、相性がわるかった。日頃の仕事の一つ一つ、意に添わず、重きをおかれなかった。睦男は、自分の成績は申し分ないので、いずれこの部門長の方が担当をかわるはずだと思っていた。

ところが、彼は、一度呼ばれて、若いものから苦情がでているといわれた。そう、それは、投書のようなかたちで訴えられていた。ハハアン、あいつが、とわかったが、氣にかけなかった。いつかわかる、投書した本人がいちばんよくわかっているのさ、という安直な受けとめ方をした。それでもそんな直訴が信じられ、仕事の限界と思われるとは想像もつかなかった。異動の理由があんがいこういう細かいところにあるというのは事実である。

一週間後から、彼は机を企画室に移し、(この机の移動は部下の力持ちがやってくれた) ひそかに書いた辞表を机の引出しにかくし、ただ黙っているだけにした。その彼に、誰も何をしろ、とはいわない。いやに整った顔のスタイルのいい美人社員が企画室にはいたが、彼女も彼の苦渋を知っている雰囲気だった。あまり美人すぎて欲しいという部門がないといわれていたこの女子社員は、すらりと足のながいところも人目をひき、“美点凝視”というあだ名がつけられていた。冷やかで感情がみられず、彼のような拘泥にひたっている男の相手をしているのにうってつけだった。彼が何故いままでの職をうつされたかは、誰も知らない。重役同士は理由づけに納得し、暗黙の了解についてべつのことばで話し合っていることだろう。しかしその理由が、なにも耳に入っていない。悪い徴候だった。一口にいえば孤絶した気持だった。

そのあとの数ヵ月間のことを、彼はスローモーション・フィルムのように憶えている。こうした春の、会社が新たな期を歩みだした季節にこだわった気持を振りかえると、異動を気に病んだ自分にしても、復元エネルギーが健全に働いていた、と睦男は思う。

彼は自分を救ったのは、自分の単純さのせいだと思わずにはおれなかった。異動は現状からみればトーナメントから降されたのだった。勤め人の世界で敗者復活戦があるかどうか誰も知らない。ただ経験を深めるためには、配置転換は必要であり、異動はあたりまえのことである。自分ひとりにだけおこっていることではない。あるとき重役が、魚だって生育のために一生かかって回遊して行くのではないか、とわらい話にしていたが、会社員の適材適所などもこの程度の野放図な考え方でしかないだろう。

ふつうなら異動が終ったあと誰かがこっそり彼を呼び出して慰労するという生ぐさい話もあるのだが、そういうことがおこらなかったのは、誰も彼の異動に無関心だったからだろう。

気をとり直す方法をさがした睦男は、毎朝、早く出社することにした。千葉県の北部にある団地に引越してから会社まで一時間半かかる電車通勤を、ラッシュ時は立ち通しでゆられて行く。ついこの前までは、出勤は電車に坐れる時刻、帰りはたいてい深夜になり、たびたびタクシーで帰宅した。時間にルーズな第一線ではそれが許されていた。

暑さに向った毎朝の電車のなかの長い立ちん坊はさすがに苦痛だった。崩れるように企画部のデスクに坐ると、疲れて腹立たしさがのこった。早朝のことで、例の美点凝視嬢だけがひとり出社していても洗った茶器や花瓶をうやうやしく持ちあるいていた。なれてくると退屈ななかにもリズムがうまれはじめ、彼女との挨拶も快くなった。そして、ラッシュで身動きできない電車の床に、足馴染みさえできてきた。

実際、不整脈もたいしたことではなくなり、足腰に自信がでてきた。

それになんといつても一時間半をひとりで過す楽しみがあつた。ラッシュというのは、どこか魚の集団に似ている。じっとしていたり、一斉にゆらいだり、走り出したりする。その群れのなかでじっと新聞を読むたのしみがうまれた。

営業系のサラリーマンとしていままでは新聞より雑誌をかかえる方が多かった。しかも新聞の一面の政治欄や後半の教養欄を読むことはなかった。電車のなかでは、この経済のうごきがとくに面白い。外国のうごきについての広い視野もたのしみの一つだった。新聞は、縦に二つに折り